

推薦の言葉

慢性腎臓病（chronic kidney disease：CKD）の概念は2002年にはじめて米国において提唱された。日本では2007年に主に非専門医を対象にCKDの概念と臨床的意義の啓発を目的に「CKD診療ガイド」（日本腎臓学会/編）が発刊された。腎臓専門医の間でCKDという概念に反発する声がかかなり聞かれたのもこの頃である。2年後の2009年に専門医を対象にした「エビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2009」（日本腎臓学会/編）が発刊された。その後、これらの診療ガイドと診療ガイドラインは何度か改訂され、2018年には両者を兼ねた「エビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2018」（日本腎臓学会/編）が発刊され、CKDの概念もようやく定着してきたかに見える。しかし、実際の実臨床の現場では、CKDに対する理解不足や誤解もまだまだあるように思える。

本書はそのような日本の臨床現場に一石を投じ、日本におけるCKD診療をより充実させ、CKDの進行をできる限り抑制すると同時にCKD患者に充実したその人らしい日常生活を送っていただきたいという、編集者と筆者たちの熱い思いが伝わってくる。CKD診療に携わるすべての医療者が手元に置いておくべき良書である。

本書でとりあげているCKDは保存期から末期腎不全、腎代替療法までと幅が広い。腎臓専門医、かかりつけ医、管理栄養士、薬剤師および理学療法士がそれぞれの立場から具体的な質問に答える形で構成されている。章立ては体系的で、実臨床の現場から発せられる切実な質問で構成されている。それぞれの質問に対して箇条書きの「Answer」が最初に書かれているため全体像を把握しやすい。また、最後に「まとめ」があるので自分の理解を確認することができる点は読者に親切である。

全体に記述が具体的であるので読者は自分の診療現場におけるイメージを容易に得ることができる。また、多くの項目に具体的な症例が提示されているので、記載されている解説に対する理解を深めることができる。さらに「ここがポイント」、「ここがピットフォール」というコラムが随所にあり、CKDの臨床に携わっている筆者たちの智恵と工夫を垣間見ることができ興味深い。診療報酬についても丁寧に解説している項目も多く実践的である。

本書によりCKD診療に携わるすべての医療関係者がCKDとその周辺の諸問題に対する理解を深めて、CKDを患う患者がCKDとともに生き生きとした人生を送ることができるように手を差し伸べてくださることを願って推薦の言葉とする。

2020年1月

独立行政法人 地域医療機能推進機構 東京高輪病院 院長
木村健二郎